

看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較

狩谷恭子, 渡會丹和子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】本研究は、T大学看護学科を対象に、死についての概念や死生観が4年間の看護教育課程でどの様に変化するのかを調査し、今後のターミナルケア教育の方向性の示唆を得ることを目的とした。調査内容は、研究者が作成した自由記載によるものと臨老式死生観尺度をもとに質問紙調査を行った。結果、死生観に影響を与えた要因は、身近な人(36.6%)や家族(29.8%)、ペット(19.9%)との死別体験であり、死について考えた時期は、大学入学前が約85%を占めていた。死生観尺度の各項目については、学年間で有意差はみられなかった。しかし、死に対するイメージでは、死への恐怖を示唆する記述が全体で最も多かったが、これには学年差があり、1～3年生で高く、4年生で低かった。T大学の学生は、死に対する考えについては学年間で差がみられ、4年生では臨地実習での患者の関わりが、死への理解を促し、死を肯定的に受け止める様になったと考えられた。しかし、「生」について考えることについては、まだ形成途上であることが示唆され、今後、死生観の「生に対する考え」について教育の強化が必要である。

(医療保健学研究 第2号 : 107-116頁 / 2011年3月2日採択)

キーワード : 看護学生, 死生観, 死別体験, 死に対するイメージ

序 論

看護におけるターミナルケアは、予後不良と診断された人とその家族の残された生命・生活・時間が、より豊かに、より安全・安楽に、より積極的に過ごせるように配慮し、その人が望む、その人らしい最後が迎えられるように援助することである。そして、ターミナルケアに関わる看護師の役割は大きく、死生観や倫理観

が求められる。それは看護大学卒業後すぐの新人看護師にも求められることである。

ターミナルケアでは、痛みの緩和技術やコミュニケーション技術の知識だけでは不十分である。避けられない死による理不尽な思いや、生きている意味を失う苦しみを持つ患者を前に、ともにその苦しみを分かち合いながら、生きる意味・存在する価値について考えていくことも必要である。しかし、このようなターミナルケアに関わる上でのスキルはすぐに身に付くものではない。そのため、基礎教育期間である看護学生の頃よりターミナルケアを学び、死や生に対する考えや感じ方を見つめ、死生観を持つことは必要であると言える。しかし、看護学生にとって「死」は未知であり、人間にとっ

連絡責任者 : 狩谷恭子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622(代表)

FAX: 029-826-6776

e-mail: k-kariya@tius-hs.jp

て最も基本的な価値観の一つである死生観は、人の心の奥にもっているものであるがゆえに、対象がどのような死生観をもっているかを正しく理解することは容易ではない。

基礎看護教育における死生観に関する先行研究は、1970年代から報告があり、看護学生の死に対する恐怖と不安に焦点が当てられた研究の他、看護の授業や臨地実習による変化を捉えようとした報告が相次ぎ、最近では死生観に焦点を当てた報告が多くなっていると述べている(風岡と伊藤, 2008)。園田と上原(2007)は、ターミナルケアの授業を通し学生の死生観の変化を、また、石田(2008)は、看護学生の死生観構築に対する教育方法について報告している。このように、看護学生の死生観について追及されている研究は多く、これらの結果から人間の「死」は日常生活のように普段の生活から体験的に深めることは難しく、学習という教育的関わりをもち、意識して「死にゆく人」について考えを深めることが必要であると考えられる。

文部科学省(2004)は看護学教育の在り方に関する検討会の報告で、学士課程で育成する看護実践能力を19項目に整理した。さらに卒業時の到達度を各項目ごとに細項目を示している。その中に、「終末期にある人への援助」の細項目として、①身体的苦痛の除去、②死にゆく人の苦悩の緩和、③基本的欲求の充足、④死にゆく人の自己実現(希望の実現)への支援、⑤看取りをする家族への支援の5項目で構成されており、看護基礎教育でターミナルケアの充実が望まれている。本研究の対象となったT大学看護学科のターミナルケアに関連するカリキュラム上の授業内容としては、1年次「生命倫理」、「看護学概論」、2年次「成人看護学概論」、3年時「緩和ケア」、4年次「臨地実習(成人看護学実習ではターミナル期実習)」など、学年の経過に伴い学生の死生観育成へつなげるカリキュラムとなっている。そこで本研究は、看護学生の死についての概念や死生観を学年間で比較することにより、それらがT大学の4年間

の看護教育課程でどの様に変化するのかわかりにし、今後のターミナルケアの教育の方向性の示唆を得ることを目的とした。

方 法

用語の操作的定義

【死生観】

死生観について、河野と平山(2000)は、生きる意味と生の延長線上にある死についてどのように捉えているかという個人の考え方という述べている。本研究での死生観も、河野と平山(前掲)の死生観を採用し、生と死に対する考え方とし、生きる意味や生きること、死についての考え方とその価値とする。

質問紙調査

質問紙調査は平成22年7月下旬から8月上旬に、T大学の看護学科1年95名、2年88名、3年50名、4年54名の計287名を対象に行われた。学生には、研究の趣旨と質問紙は無記名で個人が特定されないこと、白紙での提出も可能であることを説明し、同意した学生のみ回答してもらった。全学年で223件の質問紙が回収され、回収率は77.7%であった。調査項目は以下の通りである。

1. 基本属性

- 1) 今まで「死」について考えたことがあるか。
- 2) 「はい」と答えた方は、(1)いつ頃 (2)何をきっかけに考えたか。(複数選択回答可)
- 3) 死をどのようにイメージしているか。

1-1)については、「はい」か「いいえ」で回答させた。1-2)については、1)で「はい」と回答した学生のみ回答させた。(1)については「小学生」、「中学生」、「高校生」、「大学入学後」、「その他」、「不明」で回答させた。(2)につい

ては「家族の死」、「身近な人の死」、「ペットの死」、「書物から」、「TV等マスメディア」、「授業」、「その他」とし、死を考えたきっかけに影響した要因を複数選択可能とした。3)については、1-1)で死への関心が「なし」と回答した学生も含め、全員に自由記載させた。

2)臨老式死生観尺度(表1)は、平井他(2000)により開発された日本人の死生観を明確にするものである。尺度は7因子27項目で構成されており、「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「開放としての死」「死への関心」「死からの回避」「人生における目的意識」「寿命観」の因子について、リッカート式の7件法で回答する。各因子は得点が高い方が、それぞれの因子について強く考える傾向にあり、この尺度は信頼

性・妥当性ともに検証されている。

分析方法

分析にはエクセル統計2010(株式会社 社会情報サービス、東京、日本)を用い、以下の手順で分析を行った。

1. 基本属性

1) 死への関心の有無、死への関心の時期、死への関心の影響要因は、看護学科の学生の傾向を把握するために、全学年のデータ量を質問内容毎の割合を算出し図化した(図1)。

表1. 臨老式死生観尺度.

死後の世界観	1) 死後の世界はあると思う 2) 世の中には「霊」や「たたり」があると思う 3) 死んでも魂は残ると思う 4) 人は死後、また生まれ変わると思う
死への恐怖・不安	5) 死ぬことがこわい 6) 自分が死ぬことを考えると、不安になる 7) 死は恐ろしいものだと思う 8) 私は死を非常に恐れている
開放としての死	9) 私は、死とはこの世の苦しみから開放されることだと思っている 10) 私は死をこの人生の重荷からの開放と思っている 11) 死は痛みと苦しみからの開放である 12) 死は魂の開放をもたらしてくれる
死からの回避	13) 私は死について考えることを避けている 14) どんなことをしても死を考えることを避けたい 15) 私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする 16) 死は恐ろしいのであまり考えないようにしている
人生における目的意識	17) 私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している 18) 私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある 19) 私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている 20) 未来は明るい
死への関心	21) 「死とは何だろう」とよく考える 22) 自分の死について考えることがよくある 23) 身近な人の死をよく考える 24) 家族や友人と死についてよく話す
寿命観	25) 人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う 26) 寿命は最初から決まっていると思う 27) 人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている

2) 死に対するイメージは、学生が記述した「死に対するイメージ」の単語を分類・コード化した。コードはフィルタ機能を利用してデータを並び替え、共通の意味を持つコード毎のグルーピングを作成し、構成要素を分析した。死に対するイメージは学年間での比較を分析し、学生が考える死に対するイメージと死生観尺度との関連が学年間で変化しているのか明らかにした。分析には質的研究を行ったことのある研究者2名で行い、カテゴリー間の比較・関係性の検討を重ねた。そのうえで、分析の信頼性の確保を図った。

出も可能であること、参加・不参加に関係なく学業や成績等に不利益が生じないこと、研究結果の公表もあることを口頭と文書にて説明し、質問紙の回収を持って同意を得たとした。

なお、本研究は、つくば国際大学倫理審査委員会において審査され承諾を受けた。

結果

看護学科の学生287名に配布。回収率77.7% (223名)、有効回答率97.3%(217名)であった。有効回答の各学年の内訳は、1年57名、2年65名、3年50名、4年45名であった。

2. 臨老式死生観尺度

学年毎に各因子を構成する27項目の平均値を算出することにより、各因子の因子得点を求め、学年毎の差があるかどうかをKruskal-Wallis検定を用いて検討した。

死への関心の有無とその要因

ここでは、死への関心の有無とその要因を分析するにあたり、看護学生が看護師を目指すにあたり、どれだけの学生が「死」に対し関心を持っているのかを調査した。また、関心を持った時期とその影響要因については、学生個々の家族背景や生活背景が共通ではないため、学年比較ではなく看護学科全体で捉え把握できるようにした(図1)。

倫理的配慮

学生には、研究の趣旨を説明し協力と同意を求めた。質問紙は無記名で個人が特定されないこと、参加は自由意思によること、白紙での提

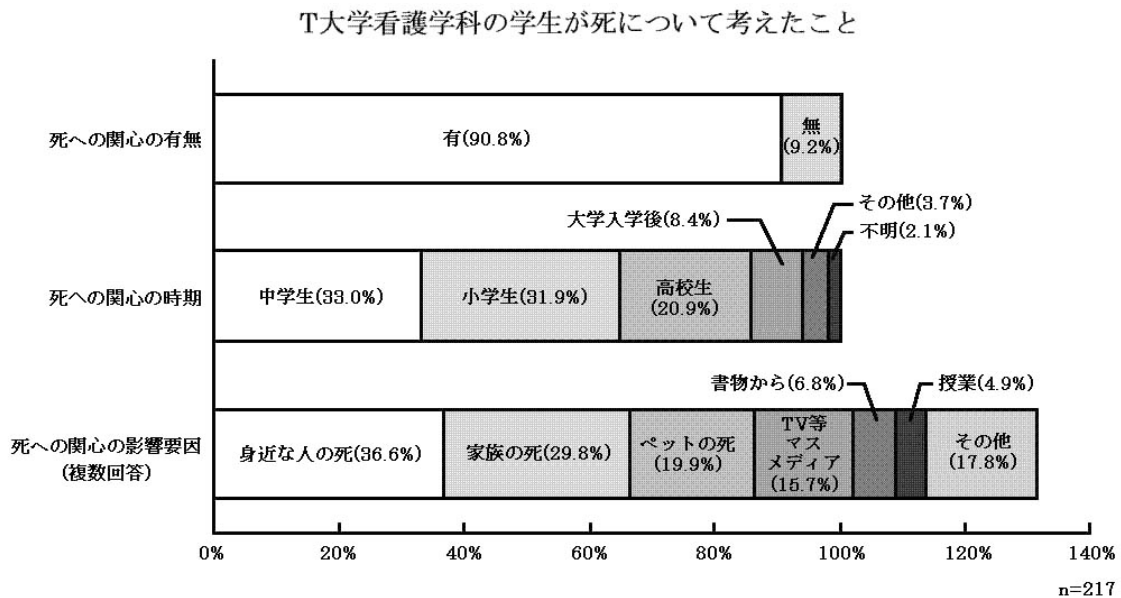


図1. 看護学科の学生が死について考えたこと.

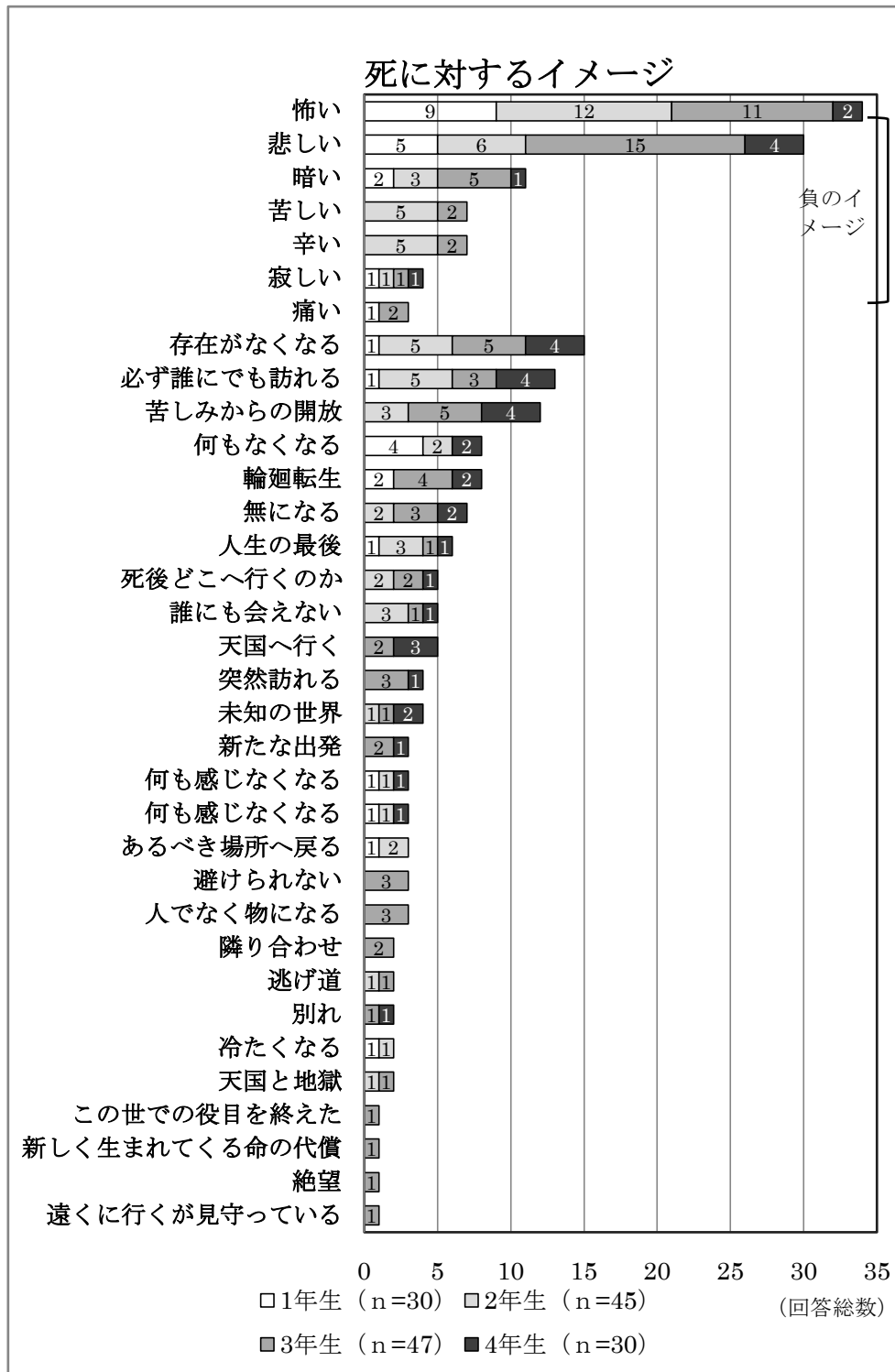


図2. 学生が考えた死に対するイメージ.

1. 死への関心の有無

これまで死について考えたことのある学生は、全学生で197人(90.8%)であり、殆どの学生が死について考えたことがあった。

2. 死への関心の時期

死について考えた経験のある学生が、いつ頃考えたかについては、小学生の時期が全学生中61人(31.9%)、中学生の時期が63人(33.0%)、高校生の時期が40人(20.9%)、大学入学後の時

期が16人(8.4%)、その他不明として11人(5.7%)であった。全学生の約85%が大学入学前に「死」について考えていた。

3) 死への関心の影響要因

死について考えた要因としては、「身近な人の死」が全学生中70人(36.6%)で最も多く、次いで「家族の死」が57人(29.8%)、「ペットの死」が38人(19.9%)、「書物から」が13人(6.8%)、「TV等マスメディア」が30人(15.7%)、「授業」が8人(4.9%)、その他が34人(17.8%)であった。その他の内訳としては、「いじめ」が34人中6人(17.6%)で最も多く、次いで「両親の離婚」や「家族の病気」、「緩和ケアの授業」が各2人(各5.9%)であった。

死に対するイメージ

死に対するイメージ(図2)については有効回答数が1年生(n=30)、2年生(n=45)、3年生(n=47)、4年生(n=30)であった。内容としては全体的に「怖い」(出現総数=34)が最も多く、次いで「悲しい」(出現総数=30)、「存在がなくなる」(出現総数=15)、「必ず誰にでも訪れる」(出現総数=13)、「苦しみからの開放」(出現総数=12)、「暗い」(出現総数=11)などが多

くみられた。特に出現回数が際立って多い上位2位までが、「怖い」「悲しい」といった死に対する負のイメージであることは注目すべきである。また、出現回数1位の「怖い」と回答した学生の26.5%が1年生、35.3%が2年生、32.4%が3年生、5.9%が4年生であり、4年生が際立って少ない結果となった。今回の全回答中では、「苦しみからの開放」(出現総数の5位)が唯一死を肯定的に捉える回答であった。これを回答した学生の25%が2年生、41.7%が3年生、33.3%が4年生であり、1年生の回答はみられなかった(0%)。

死生観尺度

臨老式死生観尺度は7因子27項目で構成されている(表1)。死への関心の有無と、死生観尺度の各因子の因子得点から学年毎に差があるかどうか、Kruskal-Wallis検定を行った。その結果、「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「開放としての死」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命観」のいずれの尺度因子においても学年間での有意差はみられなかった(表2)。

表2. 臨老式死生観尺度の学年比較.

死生観尺度	学年			
	1年(n=57)	2年(n=65)	3年(n=50)	4年(n=45)
	平均値±SD			
I. 死後の世界観	5.00±1.31	4.83±1.60	5.00±1.15	5.10±1.66
II. 死への恐怖・不安	4.86±1.67	4.87±2.00	4.80±1.52	4.30±1.72
III. 解放としての死	3.12±1.53	3.34±1.75	3.80±1.68	3.72±1.49
IV. 死からの回避	2.65±1.54	2.49±1.39	2.62±1.27	2.61±1.34
V. 人生における目的意識	3.96±1.55	3.99±1.45	4.14±1.29	4.13±1.17
VI. 死への関心	4.17±1.39	4.17±1.57	4.75±1.25	4.23±1.55
VII. 寿命観	4.13±1.82	3.99±1.94	4.12±1.27	4.05±1.78

考 察

死生観に影響を与えた因子

1. 死への関心の影響要因

本研究結果から、これまで死について考えたことのある学生は、全学生の約85%が、大学入学前に既に死について考えていたことが明らかになった。死生観に影響を与える因子として、死別体験が挙げられることは、奥他(2004)の研究により明らかにされている。本研究でも同様に、死別体験のある学生は「身近な人の死」と「家族の死」を合わせれば66.4%の学生が、更にペットの死を合わせれば86.3%の学生が死別を体験している。バーチャルではなく現実の死として、死別体験を有しており、それが死への関心の有無とその影響要因の一つとなっていると考えられる。

さらに、T大学の前身であるT短期大学1回生に対し、望月他(2005)は入学時の動機を調査した。その結果、「看護体験への参加」が32.9%と最も多く、次いで「家族の入院や通院」が24.8%、自身の「幼いころの入院や通院」が13.3%と、入学までに約70%の学生が病院という環境で自らの入院体験も含め、病んでいる人に関わっていた。本研究においても、「死について考えた経験の時期」では85.8%の学生が、本学入学前の小学生から高校生までの時期に、一度は死について考えたことがあると回答していた。看護を目指す学生にとって他者の死や病の体験は、少なからず「死」への関心に繋がり、全体で約90%の学生が死について考えたことがあると回答したと考えられる。

死生観尺度の学年比較においては、学年間で有意差は認められなかった。これは、加藤と百瀬(2009)の調査報告と同じ結果であった。その背景には、T大学の学生の80%以上が、①病いと人の死について何らかの関心を持ち入学していること、②入学後の死生観の発展を目指した講義・実習の設定が、3年生・4年生とも有意な学年差はないという結果に至ったと考える。

2. 死に対するイメージについて

死に対するイメージは、自由記載で回答された(図2)。イメージは全体的に負のイメージである「怖い」の出現総数が34で一番多く、次いで「悲しい」の出現総数が30であった。この背景には、看護学生は看護体験や死別体験などをとおし、死への関心をもち合わせているからこそ、死に対する恐怖・不安も多く感じているのではないかと考える。

本研究での学年比較では、「怖い」と回答した学生の26.5%が1年生、35.3%が2年生、32.4%が3年生、5.9%が4年生で、4年生が最も少なかった。これは、4年生はカリキュラムの学習上4/5以上履修しており、臨地実習での患者との関わりの体験から、死への関心が高まり死を肯定的に受け止めている結果、死に対する恐怖心は低くなったと推測できる。田代他(2006)の調査でも、死に対するイメージの学年比較では、1年生・2年生が「怖い」や「悲しい」、3年生は「永遠の別れ」、4年生は「人生の最後」と、学年により違いがみられた。

さらに、本研究において「苦しみからの開放」を回答した学生の25%が2年生、41.7%が3年生、33.3%が4年生であり、1年生の回答はみられなかった(0%)。これは調査の順序が、死生観尺度の前に「死に対するイメージ」を自由記載してもらった。その時点では「苦しみから開放される」ということが、1年生にとっては言葉上イメージがつかなかったのではないかと考える。換言すれば、2年生からは「成人看護学概論」や「緩和ケア」などの授業をとおり、「開放」されることの意味を考えられていた結果ともいえる。

本研究での死への関心の時期とその影響要因で、3年生・4年生の14人が、大学入学後に死について考えていた。その中の7人は「緩和ケアなどの授業」と回答しており、看護基礎教育での授業は看護学生の死生観に、影響を及ぼしているといえる。

死生観形成について

死生観は生と死に対する考え方と捉える。死を考えることで生きる意味、生きることについて考えたい。T大学の学生は、本研究結果より、死に対する考えについてはもち合わせているといえる。松岡(1992)は、死を見つめる教育とは、隠された真理、生き方を学習することであり、生きる意味を問うことも必要なのではないだろうかと述べている。しかし、「生について考えること」については、T大学看護学科の学生ではまだ形成途上と考えられる。その根拠として、「死に対するイメージ」の自由記載の中に、「人生における目的意識」を示唆する単語として、「この世での役割を終えた」がみられたが、これは必ずしも「生」を想起させるものではなかった。また、死生観尺度においても「人生における目的意識」では、いずれの学年も7件法で平均4点前後(3点：やや当てはまらない、4点：どちらともいえない)であり、決して高い得点でないことが裏付けとなる。

T大学看護学科の学生の死生観形成には、人の死について考えるとともに、死が間近な患者であっても、残された時間を精一杯「生きている人」という視点で看護を考え、提供できる看護師を育成することが必要であると考えられる。

結 論

1. T大学看護学科学生における臨老式死生観尺度では、7因子とも学年による有意差はみられなかった。
2. T大学看護学科学生の死生観に影響を与えた要因は、身近な人との死別体験であった。
3. T大学看護学科学生が死について考えたことがある時期は大学入学までが約85%を占めた。
4. T大学看護学科学生が考える死に対するイメージは、「悲しい」・「怖い」が多かったが、4年生は「怖い」というイメージは低かった。

5. T大学看護学科学生は死への関心については持ち合わせているが、「生きる」ことについては、まだ形成途上といえる。

本研究の限界と課題

本研究は、横断的研究のため1年次から4年次にかけて「死に対する考え」や、「生に対する考え」がどのように変化していくのか、変化に影響していることは何かの検討はできなかった。今後は、縦断的調査をして看護学生の死生観、特に「生に対する考え」の変化への検討をすすめていきたい。そのうえで、人生の終末にある死にゆく人に対し、より充実した生を全うできるような看護を教育する必要性があると考えられる。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたT大学看護学科の学生の皆さまに、深く感謝いたします。

参考文献

- 石田順子, 石田和子, 神田清子 (2007) 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要 18:109-115.
- 石田美知 (2008) 看護学生の死生観構築を目指した教育の一考察. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科, 人間文化研究 9:111-126.
- 糸島陽子 (2005) 死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較. 京都市立看護短期大学紀要 30:141-147.
- 奥祥子, 塚本康子, 堀内宏美, 日浦瑞枝, 中俣直美, 牛尾礼子 (2004) 看護学生の死についての態度行動. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 14:14-19.
- 風岡たま代, 伊藤ふみ子 (2008) 看護教育にお

- ける看護学生の死生観に関する本邦過去35年間の研究の概観. 横浜創英短期大学紀要 4:1-11.
- 加藤和子, 百瀬由美子 (2009) 看護学教育における看護学生の死生観に関する研究. 愛知県立大学看護学部紀要 15:79-86.
- 河野友信, 平山正美 (2000) 臨床死生学辞典. 日本評論社, 東京, pp18-19.
- 瀬川睦子, 原頼子 (2005) 終末期看護学実習における死生観構築と共感性育成の効果的指導. 川崎医療福祉学会誌 15:141-147.
- 園田麻利子, 上原充世 (2007) ターミナルケア授業における学生の死生観に関する検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 11:21-35.
- 田代隆良, 永田奏, 出田順子, 安藤悦子 (2006) 看護学生の死生観の学年間比較. 保健学研究 19:43-48.
- デーケン A (1986) 死を教える. メヂカルフレンド社, 東京.
- 日野原重明 (1995) 生と死のケア. 医学書院, 東京.
- 平井啓, 坂口幸弘, 阿倍幸志, 森川優子, 柏木哲夫 (2000) 死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床 23:71-76.
- 平山正実, デーケン A (1986) 身近な死の経験に学ぶ. 春秋社, 東京.
- 平山正実 (2002) 生と死の看護論. メヂカルフレンド社, 東京.
- 松岡寿夫 (1999) デス・エデュケーション. 医学書院, 東京, p117.
- 望月初音, 関千代子, 富田幸江, 仙田志津代, 北原佳代, 佐々木美樹 (2005) 学生の看護への志望動機とめざす看護師像－看護学科第1回生入学時の調査から－. つくば国際短期大学紀要 33:105-119.
- 山本俊一 (1992) 死生学のすすめ. 医学書院, 東京.
- 文部科学省HP. 看護学教育の在り方に関する検討会(平成15年度). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm (閲覧日：平成22年11月3日)

Original article**Views of life and death, and images towards death
among Nursing students in a university:
comparison of those views and images depends on grade levels**

Kyoko Kariya, Niwako Watarai

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

This study aimed at obtaining suggestions towards teaching courses concerning terminal care based on examining the changes about death concepts and views of life and death during four year curriculums among nursing students in a university. Data was gathered by using the Death Attitude Inventory and a free description form which this study authors established. As a result, life events which affected the views of life and death for intimate people (36.6%) followed by family members (29.8%) and pets (19.9%). The vast majority of them (85%) indicated before enrolment at the university when they thought about death. No significant difference was shown between grads about items in the Death Attitude Inventory. The largest number of free descriptions towards death images was fear of death; however, the numbers differed between grads showing high numbers in grad 1st, 2nd and 3rd grades hence low numbers in grad 4th grade. It was suggested that encountering patients in their field work activities helped the 4th grade students understand death and to face more death positively. It was also suggested that reinforcements of education towards life within views of life and death be as they were in the process of comprehending life. [Med Health Sci Res TIU 2: 107-116 / Accepted 2 March 2011]

Keywords: Nursing students, Views of life and death, Bereavement experiences, Images towards death